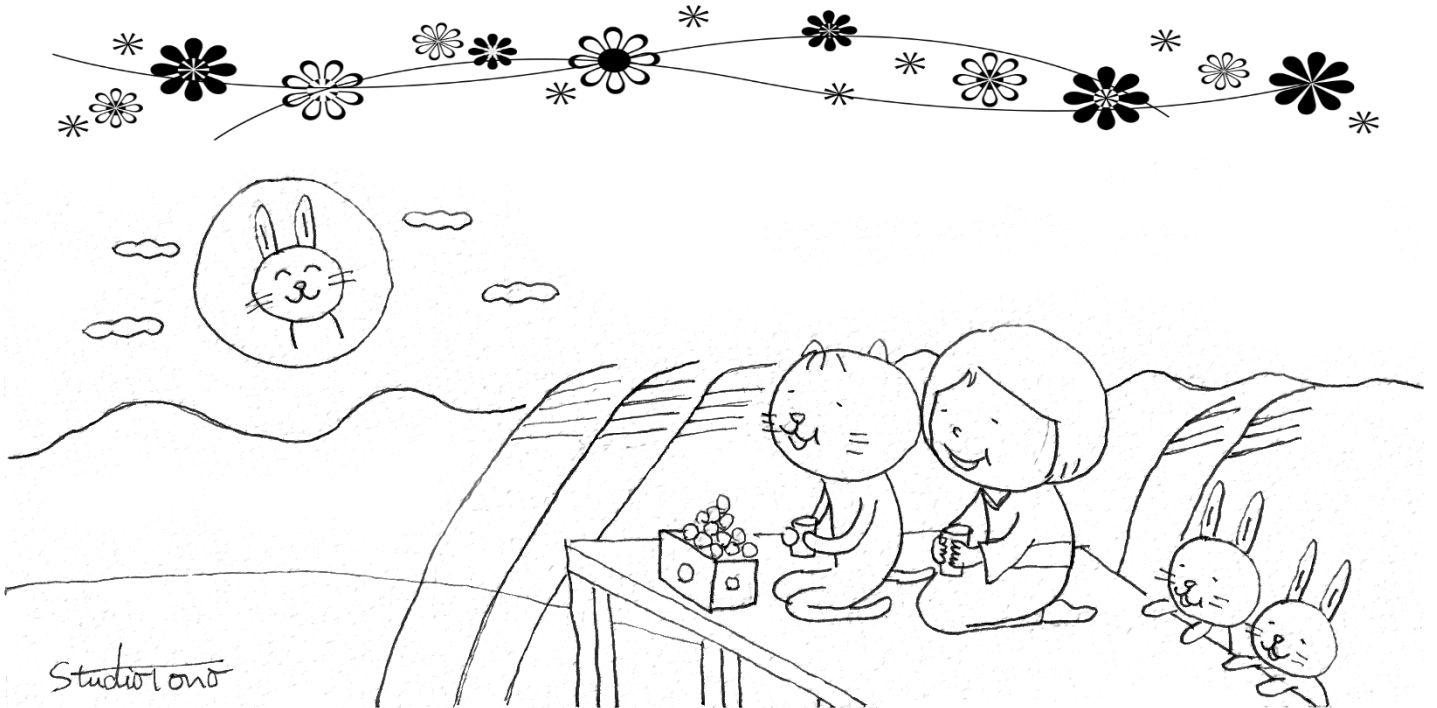


この本よんだ？

～りいぶる BOOK プラス～

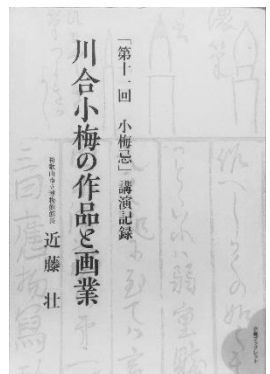


「第十一回小梅忌」講演記録 川合小梅の作品と画業

近藤壮 著 小梅日記を楽しむ会 2019年（J：自伝・評伝）

皆さんは、川合小梅をご存じでしょうか。紀州藩学習館助教の娘に生まれ、幕末から明治にかけての50年に及ぶ日記を残した女性として有名ですが、東洋文庫の「小梅日記」が世に出るまでは画家として著名だったと言います。

本書は、その川合小梅が残した絵画作品と絵の仕事について解説した小冊子です。著者は和歌山市立博物館長（当時）の近藤氏。館長は2018年8月21日、市内の旧家解体の知らせを受け調査に出向いた時に小梅の掛軸を発見しました。二日後、現代詩人「吉増剛造」の展覧会で偶然、小梅日記の原本と出会い、その不思議な縁が「小梅作品救出エピソード」として収録されています。また、この時旧家で発見された掛軸については、小梅日記に制作の経緯が残っており、絵本「小梅さんの日記」（りいぶる図書室に蔵書あり）に分かりやすく紹介されています。併せて読んで、川合小梅の豊かな世界に少しでも足を踏み入れてみてはいかがでしょうか。 (O.S)



ひとみしりの私が恋をした

倉田ちよ 著 イースト・プレス 2016年 (Q:コミック)



このコミックを読み終わって、第一声は「あ～、癒やされた」でした。本を読み終わった後、とても幸せな気持ちになりました。オタクで人見知りの主人公が、無口で無表情な男子に恋をしていく、とてもピュアな2人の物語。なぜ、その男子に惹かれたのか、どのように発展していったのかが描かれています。そしてなんと著者の実話をもとに描かれたようです。当時は、リアルタイムで公開されており、応援の声が続々！私はこのコミックを読みながら、とても可愛らしい二人の様子に始終心がポカポカしていました。1巻完結なので、長い話が苦手な方もさっと読むことができます。(めい)

ホームレス農園 命をつなぐ「農」を作る！若き女性起業家の挑戦

小島希世子 著 河出書房新社 2014年 (B:労働・法律)

著者は熊本県のまわりが農家という所に生まれ育ち興味を持ちました。だから、大学は好きな農業で進学したいと農学部を受験しましたが、失敗。一浪して慶應義塾大学環境情報学部に入りましたが、社会心理学に興味がわき文学部人間科学科へ編入し直します。アルバイトは農業関係。上京してホームレスに出会い不思議に思う。そんなところから、卒業後の人生ができていきます。



初めは体験農園と野菜のオンラインショップを運営していましたが、平日の農作業員としてホームレスやニートに働いてもらったかどうかというアイデアを思いつきチャレンジします。働きづらさをもつ全員が上手くいくわけではないが、心理療法的な要素をとり入れ「職を農につなげる」ことを実現しました。同時に農業界における高齢化や後継者、労働者不足の対策、食の可能性などを考えた女性のビジネス実践記です。(か)

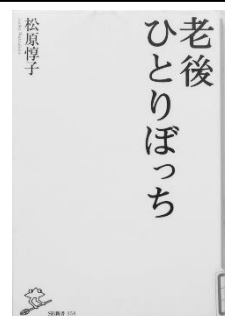
老後ひとりぼっち

松原惇子 著 SBクリエイティブ 2016年 (C:家族・結婚)

今後ひとりで過ごす老人ばかりになるが、結婚してても、子供があっても最後はひとり。

著者は、「女性に経済力さえあれば何も怖いものはない。病気の不安を持たない。今やることで頭をいっぱいにすれば先の心配をしない。寂しい見た目から明るい見た目に変えるため、明るい色を身につける。家を借りたり、介護施設への入所、入院手術には身元保証人が必要とされるが、身内がなければ、いないとはっきり言う。」と書いている。

この本は、ひとりで幸せに暮らすヒント満載の一冊です。



(はんちゃん)

老いを愛づる 生命誌からのメッセージ

中村桂子 著 中央公論新社 2022年 (L: 高齢社会・福祉)

物忘れ、鈍い体の動きなど、とかく負のイメージの「老い」を、「ものの見方や考え方」を変えてみることで実は「愛づる」に転換できるといい、それを著者が「いいな」と思う生き方をしている中島みゆき、バカボンのパパ、寅さんなどの言葉を借り、80代の自らの体験談も織り込んで分かりやすく解き明かしている。



たとえば、体力が落ちてきても、バカボンのパパのように「これでいいのだ」と受け入れるとか、日常の家事での疲労感にも、寅さんの「キリがありませんから」を思い出さささと中断してしまうとか、考え方ひとつで嘆きは減ると。

そして、科学者である著者の携わる「生命誌研究」からのメッセージとして、「地球上の生きものは一つの祖先から生まれた仲間人間はその中の一種」なのだから、わたしたち誰もすべての生きものの一人として生きてきた日々は貴いこと、かけがえのないその時代の一証人として未来を築く若者へつないでいく役割を担っていると説いている。

ささいなことでもいい「夢中になれるなにか」を見つけ、懸命に年を重ねてきて得た「知恵」が体の中に入っていると自覚して、若い人たちに自分なりの何かしらのバトンをつなげるような、老い方上手になってみようかと思った。 (大空)

58歳から日々を大切に小さく暮らす

ショコラ 著 すばる舎 2019年 (O: その他)

著者は60歳台の人気シニアブロガーです。42歳で夫との別居を機会にひとり暮らしを始めました。同時に契約社員から仕事を始め、やがて正社員になります。しかし、57歳で体調を崩したことをきっかけにセミリタイアしてパート職員になります。ある日「ミニマリスト」という言葉に出会います。必要でないもの、好きでないものを持っていたくないと考え、「老前整理」をすることになりました。



月12万円でやりくりをしています。お出掛けなど楽しい時間を過ごすときは財布の紐をゆるめ、それ以外は節約生活を無理のない範囲で行っています。「起こるかどうかわからない将来のことを考えて心配するより、今ある毎日を積み重ねていくことが老後につながる、と思っています」と著者は述べています。山あり谷ありの人生を送ってきた著者だからこそ出た言葉だと感じました。

誰もが年齢を重ねると体力が無くなり、記憶力も落ちていき無理がきかないからだになっていきます。老後のからだやお金の心配から逃れることは出来ません。年齢を重ねることを悲観するだけではなく、目の前の幸せに目を向けて日々の生活を積み重ねていきたいと思いました。 (Ma)

アーユルヴェーダが教えるせかいいち心地よいところとからだの磨き方 アカリ・リッピー 著 三笠書房 2020年 (E:こころ・癒やし)

アーユルヴェーダとは東洋医学の一つで、インド発祥の伝統医療です。約5000年前から人々の肉体・精神・魂を癒してきた健康増進法で、本場のインドやスリランカでは政府から医学と認められているそうです。私は聞いたことはありましたが、「早起きしてオイルでマッサージしなければならない」とか「瞑想をしなければならない」というようなイメージでした。しかし、本書を読むことで、単に「〇〇しなければならない」というだけのものではないと分かりました。アーユルヴェーダの目指すところは、まずは自分のことを知ること、そして、心身ともに健やかで、バランスが取れている状態に持つていくことです。その助けとして、たとえば、マッサージや瞑想などをするのだと思います。本書を読むことで、なぜそれらがいいのかということが分かりますし、実際にしてみようかなと素直に思えるような本です。ぜひ一度読んでみて下さい。



(A.T.)

しろがねの葉

千早茜 著 新潮社 2022年 (K:エッセイ・文学)

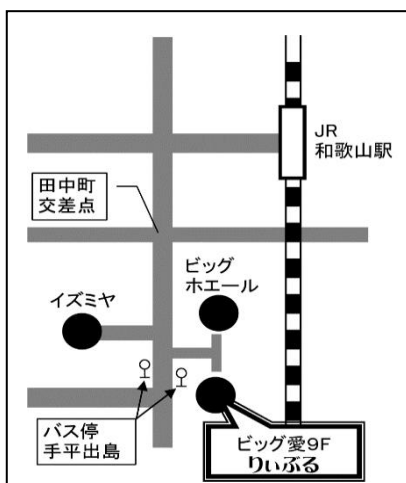
島根県の世界遺産、石見銀山を舞台にした小説で、今年一月に直木賞を受賞した作品でもある。

著者の千早茜が受賞インタビューで「鈍器で殴るぐらいの文章を書きたい」と答えているが、まさにその通りの印象だ。

戦国末期、シルバーラッシュに沸く石見銀山で天才山師喜兵衛に拾われた主人公ウメはまだ子どもだったが、銀山の知識や鉱脈のありかを授けられ女だてらに坑道で働き出す。それからの生涯は劇的で、これでもかというぐらいの困難にも負けずに立ち向かっていく。必死に「生きる」ことを選択する姿が胸を打つ。

ウメのまわりに現れる男性がとても魅力的で、それがこの作品をより一層面白くしている。私は強く生きていくことに力をもらえた。皆様もきっと！

(花賀)



この本 よんだ? 第27号 (2023年10月発行)

◇企画・発行 りいぶるぶらす

◇協力 和歌山県男女共同参画センター“りいぶる”

【編集後記】

今回初執筆の Ma さんは、本好きで近くの図書館で本紙を入手していた読者でした。今はまだ仕事で忙しくしていますが、定年後を見据えてボランティアをしてみようと思われたそうです。宜しくお祈いします。

★あなたも書評を書いてみませんか? ボランティアスタッフ募集。メールでお問い合わせください。 E-mail libreplus@yahoo.co.jp